

## 「伝わる話し方」のための10のルール

— 『実践日本語表現法』の授業現場から大学生の口頭表現を考える —

### Ten rules for “the intelligible way of talking”

On the problem of university student’s oral expression considered from the lesson  
“Practical study of Japanese expression”

外山 敦子

TOYAMA, Atsuko

#### はじめに

『実践日本語表現法』は、文学部1年生を対象とした必修の専門教育科目である（2004年度開講）。学生に配布される『履修要覧（文学部）』（2006年度版）の「授業の概要」及び「授業の目標」の項は、本科目の学修内容とその目標について次のように記す。

#### 【授業の概要】

これから大学で学ぶ専門教育の基礎として、日本語における書く・話す・読む・聞くなどの基本的な技能について学習する。

#### 【授業の目標】

日本語を有効に活用できる基礎的な知識を身につけること、身につけた知識をもとに実践的な能力を養成することを目標とする。

前期は「話し言葉と書き言葉の違い」「文の組み立て方」「分かりやすい文の書き方」「要旨の捉え方」「要約文の書き方」など、論理的な文章を書くための基礎を、後期はレポート作成の手順と方法をそれぞれ学修した上で、学生は指定された課題に基づきレポートを完成させている。

現在筆者が授業を担当している国文学科では、25名前後という比較的小規模のクラス編成を活かし、グループを組んで指定の課題について調査・プレゼンテーションをし、その成果を踏まえて各自がレポートを提出している。プレゼンテーションでは、「決められた時間内に、必要な情報や自分たちの主張を分かりやすく正確に伝える」という目標を挙げ、そのための資料の作り方や人前での話し方を実践的に学修した。その授業実践については、「国文学科における『実践日本語表現法』の実践報告—プレゼンテーションの方法—」（『愛知淑徳大学国語国文』第29号、2006年3月）で報告済みである。しかし旧稿では紙幅の都合上、後期6回分に相当するプレゼンテーションの授業のうち、第3講時「口頭表現の技術」の授業計画およびその結果については省略せざるを得なかった。本稿では、旧稿で積み残した課題について報告する。

『実践日本語表現法』は開講から3年目を迎えた。現在はより効果的な授業を目指し、学生の実態に即した様々な指導法を試みている。そこで、大学における「日本語表現」に関する教授法の現状や課題、及びそれを踏まえた本授業における実践をここに報告し、工夫に満ちた優れた授業を実践なさっている方々よりのお教を仰ぎたいと思う。

## 1. 問題の所在—〈他者意識〉の欠如した「話し方」—

大学生の口頭表現にはどのような問題があるのか。具体例を挙げて検討する。

2006年度後期のプレゼンテーションの課題（国文学科対象）は、「各グループが担当する日本文学作品について任意にテーマを設定し、その研究状況を整理して報告せよ。ただし、テーマは学説が分かれているものを選び、諸説の相違点を明らかにすること」である。発表時間は10分で、発表資料を必ず用意することを条件とした。第1講時のオリエンテーションでは、授業の進め方を説明した後、2～3名のグループを編成し担当する作品やテーマを決めた。第2～3講時で「分かりやすい発表のための技術」を学修し、第4講時から3回にわたってプレゼンテーションを行った。第4～6講時は、1グループにつき、プレゼンテーションに10分、質疑応答および教員からのコメントに15分の時間を充てた。表①は、LJ01学籍番号奇数クラス（履修者25名）の2人グループ（第1班）が『竹取物語』の素材について」というテーマでプレゼンテーションをした際の、発表と質疑応答の一部である。

第1班の発表には内容上の不備や事実誤認が散見し、他班の発表と比較すると、全体的な評価は大きく下回っている。発表グループが用意した「資料A」（表②）にも修正すべき点

表① 第1班『竹取物語』の素材についての発表及び質疑応答の抜粋

『竹取物語』は、様々な話型や説話との関係が指摘されている。中でも『斑竹姑娘』とは多くの共通点があり、その影響関係については様々な指摘があることを発表する。	
発表者	<p>〈発表〉</p> <p>今から『竹取物語』の素材について」を発表します。（中略）<sup>4</sup>『竹取物語』には、「資料A」に挙げたように、多くの日本種説話・外国種説話と関係があります。今回はこのなかの『斑竹姑娘』との関係を中心に発表したいと思います。</p> <p>『竹取物語』は、<sup>5</sup>少年が竹林で女の子を発見し、成人後、5人の求婚者が現れるも難題を出して求婚を退け、最終的に少年と結婚するという話の『斑竹姑娘』と、ストーリーがよく似ています。（後略）</p>
質問者	<p>〈質疑応答〉</p> <p>発表のなかで、『斑竹姑娘』というのが出てきましたが、<sup>6</sup>『斑竹姑娘』がどのような話か分からなかったの、あらすじを教えてください。</p>
発表者	<p>（困惑した表情で）<sup>7</sup>先ほど説明しましたが。少年が竹林で女の子を発見し、成人後、5人の求婚者が現れたけど難題を出して求婚を退け、最終的に少年と結婚するという話です。</p>
質問者	<p><sup>8</sup>あ、すみませんでした。</p>
教員	<p>今のやりとりに関連して聴き手のみなさん全員に質問します。今の質問者と同じように、<sup>9</sup>先ほどの発表中、『斑竹姑娘』がどのような話か分からなかった人は手を挙げてください。</p>
聴衆	<p><sup>10</sup>（全員が挙手する）</p>

表② 発表グループが用意した「資料A」

日本種説話	外国種説話
化生説話	遊仙窟
到富長者説話	斑竹姑娘
求婚説話	穆天子伝
難題説話	漢武帝故事
相聞説話	漢武内伝
昇天説話	漢武洞冥記
白鳥説話	搜神記
羽衣説話	搜神後記
貴種流離説話	統齋諧記
など	靈異伝 など

は多々あるが、本稿では発表内容には敢えて立ち入らず、発表班の「話し方」や、質問者とのやりとりに焦点を絞って問題点を指摘していくこととする。

まず、表①下線Bで、発表者は『斑竹姑娘』のあらすじを口頭で述べた後、『斑竹姑娘』と『竹取物語』のストーリーが似ていると説明した。しかし発表後の質疑応答では、表①下線Cで『斑竹姑娘』のあらすじを教えてほしいという質問が出る。これに対して発表者は、表①下線D「先ほど説明したんですけど」と不快感を示しつつ、下線Bで説明したあらすじを再度伝えた。先ほどの質問者は申し訳なさそうに、表①下線Eで「すみませんでした」と謝っている。下線Dと下線Eのやりとりは、発表者と質問者の双方が「説明を聞いていなかった方が悪い」という共通した認識を持っていることを示していよう。しかし、このやりとりを見ていた筆者が、表①下線Fで『斑竹姑娘』のストーリーが分からなかった聴衆に挙手を促したところ、表①下線Gのように全員が手を挙げた。つまり、発表者が説明したはずの『斑竹姑娘』のストーリーは、聴衆に全く伝わっていなかったのである。このような結果であっても、発表者は「説明を聞いていなかった方が悪い」と、はたして居直ることができるだろうか。

藤沢晃治は、分かりにくい説明の結果責任の所在について次のように述べている。

お役所に限らず、無競争分野の人々はたいてい説明とは「情報をただ与えること」で足りると誤解しています。分かりにくいと苦情を言っても「さっき、ちゃんと説明したじゃないか」とか「ここにちゃんと書いてあるじゃないか」と「情報をただ与えた」ことを主張するのです。<sup>1)</sup>

藤沢の述べるように、話し手——聞き手間の相互理解が成立しなかった場合、学生たちはその責任を、(説明を聞いていなかった)聞き手が負うものと考えていたようである。むろんそうした場面も実際にはあるだろうが、少なくとも表①の事例は、自分たちの説明が聴衆にどのように受け止められるか、すなわち〈他者意識〉が発表者に欠けていたことを示す典型的な例といえよう。では、発表班が『斑竹姑娘』のあらすじを説明したにもかかわらず、聴衆に全く伝わらなかったのはなぜか。その原因を探るべく、まずは大学における口頭表現

教授法の現状を概観することとする。

## 2. 口頭表現教授法の現状

現在、初年度教育の一環として全国の大学で設置が増えている「日本語表現」関連科目では、どのような内容を指導しているのだろうか。三宅和子の調査によれば、当該科目の指導内容はおおよそ表③のように分類でき、このうち大学教育者側によって要請の高い論文やレポートなどのアカデミックな課題を遂行するのに必要な実践能力を指導するケース（表③のAとCとの組み合わせ）が最も多いことが明らかになっている。<sup>2)</sup>

表③ 「日本語表現」関連科目の指導内容

	A 学問的指導	B 社会生活的指導
C 「書く（読む）」指導	論文・レポートなど	礼状・案内状、就職願書など
D 「話す（聞く）」指導	ゼミ発表、ディスカッション、スピーチなど	公共の場・大学関係者との応答、就職面接など

本学文学部の『実践日本語表現法』では、前後期を通じて上記の項目を網羅的に取り扱えるよう授業計画を立ててはいるものの、他大学と同様、表③A—Cの組み合わせに重点を置いている。近年、続々と出版されている大学生用の「日本語表現」関連科目テキストの内容を概観しても、この傾向は明らかである。例えば、現在本学で使用しているテキスト『書き込み式日本語表現法』（名古屋大学日本語表現研究会編、三弥井書店）では、表③A—Dの組み合わせである口頭発表やディスカッションに関する項目はない。筒井洋一は、大学の「日本語表現」関連科目に関する検討すべき課題のひとつとして、未だに教授法・教材が確立されていないことを挙げ、特に「口頭表現においては、まだほとんど未開拓である」と述べている。<sup>3)</sup> いかにして大学生の口頭表現の技術を向上させるのかについては、早急に検討すべき課題のひとつであろう。

現在すでに一部の大学では口頭表現指導が行われているが、ここではどのような授業が行われているのだろうか。荒木晶子は大学での次のような授業実践を紹介している。

過去10年間にわたって、私が「口頭表現法」という授業で実践してきた方法がある。授業は15人前後の少人数制。そこで学生は毎回与えられたトピックに沿って、3分前後のスピーチをする。そのスピーチの姿をビデオカメラに、声はカセットテープレコーダーに録音する。学生がスピーチをしている間、聞いているほうは、評価用紙に細かいチェックをしていく。この用紙にはたとえば、声の「大きさ」「早さ」「間の取り方」「明瞭さ」や「顔の表情」「視線」、スピーチの「内容」「構成」、「自分の意見が明確に述

べられていたか」など、約10個ほどの項目がある。さらに、コメント、アドバイスをそれぞれが書き込むのである。このコメント用紙は、スピーチが終わるとすぐ集められて本人に渡される。<sup>4)</sup>

この方法は、まず「自分を知る」ことを目的としている。録画（録音）された自分の姿や声を見直し、自分が他人からどう見られ（聞かれ）ているのかを追体験する。つまり〈他人〉になって客観的に自分の欠点をチェックすることが可能なのだ。〈他者意識〉の獲得の第一歩である。この訓練を一学期間続けていくと「学生は確実に人前で話すことの苦手意識を克服する」と荒木は述べる。「人前で話すことが苦手」と思い込んでいる大学生は多い。荒木の教授法は、そうした思い込みから解放させる有効な方法であるといえよう。

また、荒木の授業で用いられている評価用紙の「約10個ほどの項目」（下線部分で紹介されているのは、このうちの9項目）からは、荒木が口頭表現において何を重視しているのが垣間見える。評価用紙には、〈話し方〉を評価する項目（声の「大きさ」「早さ」「間の取り方」「明瞭さ」「顔の表情」「視線」）が6個あるのに対して、〈話す内容〉を評価する項目（「内容」「構成」「自分の意見が明確に述べられていたか」）が3個と少ない。この項目設定からは、口頭表現の成功の鍵が〈話す内容〉にあるのではなく、〈話し方〉つまりパフォーマンスにあるのだとする荒木の主張が垣間見える。また、荒木は口述原稿を用意して話すとは失敗するとも述べている。〈話す内容〉にばかり気をとられ、効果的に話すための〈話し方〉に全く注意を払わなくなる、という理由からである。<sup>5)</sup>

荒木の授業実践を見る限り、大学での口頭表現指導は、〈話し方〉指導がその中心を占めており、〈話す内容〉に対する指導は二次である。さらに、次章で紹介する「どんな言葉を用いて話すか」という視点は欠落していると言わざるを得ないだろう。

### 3. 分かりやすい口頭表現のための三要素

改めて第1班のプレゼンテーションの事例（表①）を考える。発表班が『斑竹姑娘』のあらすじを説明したにもかかわらず、なぜそれが聴衆に伝わらなかったのだろうか。その原因は二点あると考えられる。

第一に、下線A『『竹取物語』には、「資料A」に挙げたように、多くの日本種説話・外国種説話と関係があります。今回はこのなかの『斑竹姑娘』との関係を中心に発表したいとします』という説明である。聴衆が「資料A」のどこに『斑竹姑娘』の名があるのかを探している間に、口頭で『斑竹姑娘』のあらすじの説明が先行してしまい、聞き逃したのである。

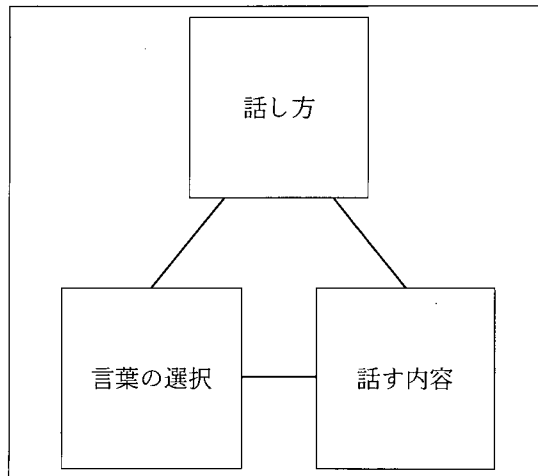
第二に、下線B『『竹取物語』は、少年が竹林で女の子を発見し、成人後、五人の求婚者が現れるも難題を出して求婚を退け、最終的に少年と結婚するという話の『斑竹姑娘』と、ストーリーがよく似ています』という表現である。これは、『斑竹姑娘』のあらすじと、『竹

取物語』との関係という二つの要素を一文で説明しようとしたため、大変分かりにくい構文になっている。聴衆は、耳で聞いた情報を頭の中で組み立て直すのに時間がかかり、結果として聞き逃したものと考えられる。

つまり第1班の分かりにくさの原因は、〈話し方〉や〈話す内容〉にあるのではなく、情報を伝えるための〈言葉の選び方〉にあったのだ。

文章表現の場合、推敲を重ねて言葉を厳選することは当然の行為としてすでに定着している。これに対して、口頭表現の分野のそれは大きく遅れをとっているといえよう。そもそも、何度も読み返すことができる文章表現とは異なり、口頭表現の言葉は「一回きり」で消えてしまう。だからこそ、「一度聞いただけで瞬時に理解できる表現」を吟味する作業が、本来は重視されてもよいはずなのである。表④下線Bの場合も、これを文章として「読む」ならば、おそらく理解できたのだろう。しかし、「聞く」という行為だったからこそ聴衆は理解できなかったのだ。従って本稿では、分かりやすい口頭表現のために、以前より指導の対象になっていた〈話し方〉及び〈話す内容〉の二要素に、新たに〈言葉の選択〉を加えたものを「口頭表現の三要素」として提示したい。

表④ 分かりやすい口頭表現の三要素



#### 4. 「伝わる話し方」のための10のルール

以上を踏まえた上で、「読んで理解できる表現と聞いて理解できる表現とは異なる」という観点から、「伝わる話し方」に必要な言葉の選び方のルールを10に絞り、61ページ表⑤に提示する。<sup>6)</sup> 表中の「×」は改善する前の例文を、「○」は改善した後の例文をそれぞれ表すものとする。

表⑤の(1)～(10)について、簡潔に説明を加える。

(1)と(2)に共通するのは、漢字表現の扱いである。(1)では、書かれたものとして読

表⑤ 「伝わる話し方」のための10のルール

- (1) 漢字の羅列はできるかぎり分解する。
  - ×文化庁主催国際文化交流懇談会参加予定者をお知らせします。
  - 文化庁が主催する国際文化交流懇談会への参加予定者をお知らせします。
- (2) 同音異義語に注意する。
  - ×彼の実家は青果業をしているため、朝が早く大変です。
  - 彼の実家は果物屋をしているため、朝が早く大変です。
- (3) 数値を示す。
  - ×少子化が加速する原因は、若者の晩婚化、女性の社会進出、経済の低成長です。
  - 少子化の加速には、三つの原因があります。第一に若者の晩婚化、第二に女性の社会進出、第三に経済の低成長です。
- (4) 見出しを示す。
  - ×『たけくらべ』は、……という話です。
  - 『たけくらべ』のあらすじを説明します。『たけくらべ』は、……という話です。
- (5) 結論を先に述べる。
  - ×以上三つの理由から導き出した結論は、晩婚化と少子化の加速との間に必ずしも因果関係はないということです。
  - 晩婚化と少子化の加速との間には、必ずしも因果関係はありません。その理由を三つ説明します。
- (6) 一文を短くする。
  - ×今日は休業日なのですが、上司から電話があって会社に呼び出されて仕方なく仕事をしたのですが、今日こそは上司に文句を言おうと思ったのですが、私はいざ話すとすると説明が長くなってしまふ癖があるので、どうにかして直さなければいけないと思っています。
  - 今日は休業日でした。ところが、上司からの電話で会社に呼び出され、仕方なく仕事をしました。そこで、今日こそは上司に文句を言おうと思ったのです。しかし、私はいざ話すとすると説明が長くなる癖があります。この癖をどうにかして直さなければいけないと思っています。
- (7) 一文で述べるのは原則として一要点とする。
  - ×少子高齢化の進展に伴い納付者が減少し受給者が増加する現状を放置することによって制度の破綻が予想される年金の改革を、今すぐ実施すべきなのです。
  - 少子高齢化が進んでいます。これに伴い、年金を納める人は減少しています。逆に、年金を受け取る人は増加しています。このままの状態を放置すれば、年金制度は破綻するでしょう。ですから、年金制度の改革は、今すぐ実施すべきなのです。
- (8) 長い修飾句を用いない。
  - ×彼は、眉間にしわを寄せて険しい顔をしながらうつむき加減で歩いている友人に声をかけました。
  - 彼は友人に声をかけました。その友人は、眉間にしわを寄せて険しい顔をしながらうつむき加減で歩いていました。
- (9) 既知情報を先に、新情報を後に述べる。
  - ×糖尿病のしくみについて説明します。グルコースという物質を細胞に取り込めなくなる病気が糖尿病です。タンパク質の機能の低下によって、グルコースを細胞に取り込めなくなります。運動によって予防できるのが、このタンパク質の機能の低下なのです。
  - 糖尿病のしくみについて説明します。糖尿病とは、グルコースという物質を細胞に取り込めなくなる病気です。グルコースを細胞に取り込めなくなるのは、タンパク質の機能が低下するからです。このタンパク質の機能の低下は、運動によって予防できます。
- (10) 視覚情報（資料）と聴覚情報（口頭による説明）とを効果的に組み合わせる。
  - ×『竹取物語』には、「資料A」に挙げたように、多くの日本種説話・外国種説話と関係があります。今回はこのなかの『斑竹姑娘』との関係を中心に発表したいと思います。
  - 「資料A」をご覧ください。『竹取物語』は、日本種説話・外国種説話それぞれ多くの説話との関係が指摘されています。今回は「資料A」に挙げたもののうち、表の右段上から二つめの『斑竹姑娘』との関係を中心に発表します。

む場合は特に違和感はないが、聞く場合は理解しづらい。漢字の羅列はできるかぎり分解する必要がある。(2)も同様で、文章表現の場合は全く問題はないが、口頭表現の場合には、「青果業」の同音異義語である「製菓業」や「生花業」との区別がつかない。少々稚拙だが、「果物屋」と表現すれば、そうした誤解は招かない。

(3)～(5)に共通するのは、「必要な情報を先に示す」ことである。(3)では、「少子化が加速する原因」がいくつ提示されるのかが分からないまま、聴衆は最後まで聞き続けなければならない。あらかじめ「要点は何点あるのか」、「いまは何番目の話なのか」という数値を示すだけでも、聞き手に安心感を与えることができる。(4)では、今から『たけくらべ』の何について説明しようとしているのかが分からない。最後まで聞き、ようやくあらすじについて話していたのだと理解できた時点で、すでに肝心のあらすじは記憶から消えている。それを防ぐには、今から「何を」話すのかという「見出し」を先に示す方法が有効である。(5)も、着地点の見えない話は聞き手に苦痛をもたらすだけである。先に結論を述べ、その後、理由や具体例を挙げた方が分かりやすい。

(6)～(8)に共通するのは、「意味が確定しない長い話は記憶するのが困難である」という点である。(6)は、曖昧な接続語である「が」を何度も使用しているため、話が終わらない。一文が長くなりすぎると、聞き手は始めの話を忘れていく。無意味に話を引き延ばさないことが、分かりやすさにつながる。(7)は、「少子高齢化の進展」「納付者の減少」「受給者の増加」「現状放置による年金制度の破綻」「改革の早期実施」という5つの要点を、たった一文で説明しようとしている。その結果、主語と述語、修飾と被修飾の関係が複雑に絡み合う表現となり、瞬間的に意味が理解できない。一文で述べるのは原則として一要点のみとすることで、文が短くなり理解も容易になる。(8)は、「彼は、眉間にしわを寄せて陰しい顔をしながらうつむき加減で歩いている……」という文脈から、「眉間にしわを寄せて……歩いている」のは「彼」であるかのような誤解を与えてしまう話し方である。口頭表現では、長すぎる修飾句は理解の妨げになる。情報はできるかぎり単文の形式で説明するのが効果的である。

(9)は、聞き手にとって「既知っている情報」を先に示し、「新しい情報」を後で示しながら話を展開させていく方法である。まず初めの文では、「糖尿病」という既知情報を先に示し、次に「グルコースという物質を細胞に取り込めなくなる病気」という新情報を示す。一度聞いた情報は聞き手にとって既に知った情報となるため、次の文では「グルコースを細胞に取り込めなくなる」ことを既知情報として先に示し、新たな情報である「タンパク質の機能が低下」を後から示す。続けて次の文では、既知情報の「タンパク質の機能の低下」を先に、新情報の「運動によって予防できる」ことを後に示す。このような方法により、新しい情報を芋づる式に次々と理解させることが可能になるのである。

(10)の例文は、表①下線Aの学生の口頭表現を再度用いた。プレゼンテーションの場合には、資料等を準備し、視覚と聴覚の両面に訴えていく方法をとることが多い。このとき、聞



き手の視線を発表者の意図する部分にうまく誘導しなければならない。それを誤ると、聴覚情報と視覚情報とが切り離され、互いに協調しないのである。この場合も、「資料A」に示した『斑竹姑娘』の項に聞き手の視線を誘導したいのに、「このなかの『斑竹姑娘』」と言うだけでは、聞き手は「資料A」のどこを見て良いのか分かるまい。視覚による情報を口頭による説明の理解に役立てるには、「表の右段上から2つめの『斑竹姑娘』」などと具体的に見てほしい場所を示し、聞き手の視線をうまくコントロールする必要がある。

最後に、これらのルールに従って、表④に挙げた第1班の口頭表現を改編すると表⑥のようになる。

表⑥ 第1班の口頭表現の改編例

「資料A」をご覧ください。『竹取物語』は、日本種説話・外国種説話それぞれ多くの説話との関係が指摘されています。今回は「資料A」に挙げたもののうち、表の右段上から2つめの『斑竹姑娘』との関係を中心に発表します。まず、『斑竹姑娘』のあらすじを説明します。少年が竹林で女の子を発見します。この女の子が成人すると、5人の求婚者が現れます。しかし、女の子は5人の求婚者に難題を出してこれを退けます。そして最後は少年と結婚するという話です。この『斑竹姑娘』のストーリーが、『竹取物語』とよく似ているとの指摘があります。

## おわりに

本稿では、大学生の口頭表現能力をめぐる問題と、現在の口頭表現教授法の特徴を指摘した上で、ささやかながら今後の指導の方向性を示した。従来の口頭表現指導では、〈話し方〉や〈話す内容〉に対して、〈言葉の選択〉を指導するという意識が低い。「聞いて理解できる表現」と「読んで理解できる表現」との違いを理解し、実践する能力をいかにして養成していくのか。今回の提案はいまだ荒削りの域を出ていないが、今後は研究の成果に支えられた具体的な教育の指針や指導法を提案していきたい。

## 注

- 1) 藤沢晃治『「分かりやすい説明」の技術』（講談社、2002年10月）。
- 2) 三宅和子「「日本語表現能力」を育てるとは—大学生の日本語表現能力をめぐる問題と教育の方向性—」（『文学論叢』第76号、2002年3月）。
- 3) 筒井洋一「大学生の表現能力をどのように学問へと導くのか—日本語表現法の全国的広がりとその課題—」（『秘書教育研究』第6号、1999年2月）。後に同氏著『言語表現ことはじめ』（ひつじ書房、2005年2月）に所収。
- 4) 荒木晶子「「話す力」がつく最強最短プログラム」（『自己表現力の教室—大学で教える「話し方」「書き方」—』情報センター出版局、2000年4月）。
- 5) 大学生用テキストとして出版された『プラクティカル日本語 口頭表現編—自己表現の型』（福沢健ほか著、おうふう、2004年3月）では、プレゼンテーションの場に原稿を持って行くことについて否定は

していないものの、聴衆に目を向けず原稿を棒読みすると印象が悪くなるため、原稿なしでも話せるようにと説く。

- 6) 本稿で提示したルールは、本学の学生の実態に即して作成したが、一部以下の文献による指摘等を参考にした。参考文献：『話しことば検定 3級テキスト』（日本話しことば検定協会編、1998年8月）、『学生・社会人のための表現入門』（榊原邦彦ほか著、和泉書院、2000年3月）、『プラクティカル日本語 口頭表現編—自己表現の型』（福沢健ほか著、おうふう、2004年3月）、『「分かりやすい話し方」の技術』（吉田たかよし著、講談社、2005年5月）。